



森のおはなし — column —

痕跡の特定からはじめるニホンジカ対策

森林総合研究所東北支所 高橋 裕史

ニホンジカをめぐる状況

東北地方にニホンジカが分布を広げて生息数を増やしており（写真1）、深刻な農林業被害の発生が懸念されます。増えすぎたニホンジカの生息数抑制は、関東以西や北海道のように、食害が看過できないレベルで発生したり、大きな群れを頻繁に目撃したりする状況になってから始めたのでは、膨大な労力と時間がかかり、なかなかうまくいきません。一方、私たちは計画的にニホンジカを低密度な状態のままに抑制する経験や実績を持たないため、それを効果的に達成するまでには相当な試行錯誤が必要になるでしょう。したがって、ニホンジカの生息数がまだ少ない間に、なるべく早く生息を検出する技術を確認しておく必要があります。



写真1：ニホンジカの群れ（2018年1月、田沢湖畔）

対策のカギは越冬地

東北地方でニホンジカが生き延び、生息数を増やしていくためには、厳しい冬をどこかでやり過ごす必要があります。この越冬地を把握することが対策では重要になります。積雪によって行動が制約される雪国では、周辺より積雪が少なく、餌場となるササや灌木の豊富な伐開地などに隠れ場となるスギ林が組み合わさった場所が、越冬地としてニホンジカが集まりやすいことが他地域の事例からわかっています。生息数を抑制するための捕獲を行うにしても、ニホンジカが少数ずつ散らばっている夏より、越冬地に集まっている冬の方が、効率的に捕獲できそうです。

越冬地を見つけ出す

ある期間ある地点にニホンジカが滞在すると、食痕や糞、寝跡などの生活痕跡が残ります。冬の間に残された痕跡を探し、それがニホンジカによるものとわかれば、越冬地を特定することができます。ニホンジカとカモシカが混在する地域では、食痕や糞などの痕跡がどちらのものなのか見た目では正確に区別できませんが、「ニホンジカ・カモシカ識別キット」を用いることで確実に判別できるようになりました（詳細は、岩手の林業741号を参照）。この方法では、食痕や糞に付着しているDNAを利用

しますが、DNAは時間の経過とともに分解、消失していくため、なるべく新しい痕跡を見つける必要があります。

現在私たちは冬の餌としてニホンジカに利用されやすいササ類の食痕に注目しています（写真2、3、4）。冬期にササ類の常緑の葉は、他の植物（の部位）に比べて相対的に栄養価が高いとされており、また大きな群落になりやすいことから、質的に優れた冬の餌となっている可能性が考えられます。カモシカもササ類を利用するとの報告もありますが、これまでのところ東北地方で採取したクマイザサやチシマザサ、チマキザサなどの食痕からは、ニホンジカのDNAだけが検出されています。



写真2：歯形が残るクマイザサの食痕



写真3：ニホンジカの吻部（麻醉中）



写真4：さらに食われたクマイザサ

連携による取り組み

このように森に入って新しい痕跡を探す調査は、小人数ではわずかな範囲しか調べられません。そこで森林総合研究所東北支所では、令和元年度の支所研究プロジェクトとして、多くの機関との連携協力のもと、効果的な痕跡の探索、収集方法を模索しながら、秋田県内のニホンジカ生息状況、越冬地の特定（秋田県林業研究研修センター）と農業被害の状況（秋田県教育庁文化財保護室）、白神山地周辺の生息状況と越冬地の特定（東北森林管理局津軽白神森林生態系保全センター、同藤里森林生態系保全センター、東北地方環境事務所西目屋自然保護官事務所）に取り組んでいます。